UR 都市機構 シリーズ企画

復興現場のいまを歩く

Vol.4 宮城県女川町

高台の災害公営住宅「運動公園住宅」を訪れた小林氏と須田町長。

「新しいまち」が動き出す。小林武史と須田町長が描く女川の未来。

東日本大震災の復興支援を続ける非営利組織「ap bank」代表の、音楽プロデューサー小林武史氏。第4回は、3月21日に「まちびらき」を迎えた女川町の須田善明町長を訪ね、まちの未来を対話した。

まちの中心部は利便性の高いコンパクトシティへ

小林　僕は震災直後から何度も女川を訪ねていますが、須田町長の熱意は深く感じていました。女川駅もでき、遂に「まちびらき」ですね。町長ご自身も一段とパワーアップしている気がします。

須田　女川はまちの7割が津波に流され、人口流出も被災前の2.6倍。厳しい現実です。未来のまちはどうあればいいか…。そこで住宅地は高台に移し、平地は利便性の高いコンパクトシティにしようと。中心部にプロムナードを設け、そこでは例えば、店の前で子供たちがボール遊びもできます。ゼロから作り上げるまちだからこそ、誰もが自由に楽しめる空間を盛り込みたい。居心地がよければ人のつながりも戻ってくると思うんです。

小林　空間や場が人と人をつないでいく。僕たちが音楽イベントなどで実施していることと共通していますね。取り組みは多岐ですが、言っておられることはシンプルで力強い。震災という辛い出来事をポジティブな力に変えて、果敢に進む女川のまちづくりには清々しい思いがします。

須田　まちの方々も、復興に携わる皆さんも頑張ってくれています。住宅地やまちの中心部の完成を待つ方たちのため、これからも立ち止まってはいられません。

須田善明

すだ よしあき

1972年女川町生まれ。父は元町長の故善二郎氏で、明治大学卒業後、会社員を経て2011年から現職。震災で家を失い、家族4人と仮設住宅住まい。若きリーダーとして復興のためエネルギッシュに活動を展開。

まちが変わっていく限り「まちびらき」は続く

小林　まちというものは、計画の達成=ゴールというのではなく、そこで生きていく人が大事ですね。

須田　そう、ゴールは常に変えていかないと、まち自体が活力を失います。今進めている計画が、10年後に正解かどうかはわからない。次の世代が必要とすれば、プロムナードを車道にしてもいいし、「場」の使い方も変えればいい。プランでは、そんな余地や柔軟性を大切にしています。

小林　駅に温泉もあるし、女川は魚もおいしい。「まちびらき」を通して、今後の楽しさや居心地のよさが伝わってきます。

須田　この3月は、「まちびらき・2015春」なんです。津波で失われたまちを、新しく開く第一弾。瓦礫の撤去から始まって、ここまで来たということです。冬もやります。来年もやりますよ（笑）。

小林　何度も続く「まちびらき」…。復興の形として素晴らしいですね。そのユニークな発信力に、僕たちも刺激されます。

東北の地域社会における新たな価値を見出すために

須田　まちを作り直し、これからの地方社会の可能性を作り出していく上で、URさんの経験やノウハウは不可欠でした。今、まちの姿は日一日と変わっています。復興とは、そのプロセスの中で新しい価値を見出していくことだと思います。

小林　工事の進む現場を見ても、未来は捨てたものじゃないなと。この地域のポテンシャルと叡智（えいち）を感じます。我々は今、被災地支援の芸術祭を計画しています。ぜひ一緒に取り組みたいですね。

須田　社会にさまざまなメッセージを発信してきた小林さんのご提案は、女川町にとっても、新たなチャレンジに向かうチャンス。楽しみにしています。

小林　須田さんのしなやかな行動力に感服します。ありがとうございました。

小林武史

こばやし たけし

1959年山形県生まれ。サザンオールスターズ、Mr. Children など多くのアーティストを手がける日本屈指の音楽プロデューサー。2003年櫻井和寿らとともに非営利組織「ap bank」を設立。東北の復興支援など幅広く活動している。

広告

URの復興支援・女川

女川駅開業を皮切りに、各施設とも建設が進行中

最大津波高14.8mもの津波により壊滅的な被害を受けた女川町は、UR都市機構とパートナーシップ協定を結び、中心部と離半島部を包括した復興まちづくり事業を委託。現在も各地域で復興工事が進む。中心部では切土により高台住宅地を配置するほか、盛土によって高さを3段階のエリアに分けた。約10m嵩上げした高台は住宅地、約4m嵩上げの部分は商業施設などを集約した市街地、海側の低地は公園や漁港施設を配置する計画である。

現在はJR石巻線の始発終着駅である女川駅と、駅前交通広場などが完成。3月21日には「まちびらきイベント」が開催され、臨時列車も運行された。

世界的建築家である坂茂（ばんしげる）氏が設計した駅舎は、ウミネコをイメージした白い屋根。震災前から地域で親しまれていた温泉施設「ゆぽっぽ」と合築している。女川復興支援事務所の後藤浩所長は「着工約2年でここまできました。駅から海に向けて伸びるプロムナードやテナント型商店街、公益施設は年内完成予定です」と話す。同時進行で高台の住宅地造成も進む。「まちの人々の思いを、URがしっかり受け止めているのがわかりますね」と小林氏。未来の女川を見据えたまちづくりが進む。

JR女川駅（中央）から伸びるプロムナードが今後作られ、商店などが並ぶ賑やかな通りに。

上段／JR女川駅の3階展望デッキからは女川の海が望める。下段／陸上競技場を宅地化した「運動公園住宅」は8棟200戸で昨年完成。右／UR女川復興支援事務所の後藤浩所長。

ap bank の活動

トレーラハウスの宿泊村・El Faro

2012年12月オープン。女川町で被災した4つの旅館で設立された「女川町宿泊村協同組合」が運営する。「El Faro（エルファロ）」はスペイン語で「灯台」のこと。部屋入口にある地元で制作されたスペインタイルのプレートが温かみを添えている。ap bankでシェフを短期派遣し、メニュー開発などの支援をした。

街に、ルネッサンス

UR UR都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

http://www.ur-net.go.jp/saigai/